

この反転がパスカルの主張においてどのように生み出されたかの分析は興味あるところである。かれはまず「主張が魂に受け入れられるときには、魂のふたつの主要な能力たる悟性と意志のふたつの入り口を通過する」ことを思い起こさせる。ここでパスカルが考えている主張とは、明らかに、すでに上で見たように、理性の支配だけに服する数学的あるいは学問的命題のことである。したがって、当然、パスカルはすぐ次のように付け加える。「もっとも自然なのは悟性の入り口である。われわれは証明された真理にしか同意すべきではないからである。」まさに実験と推理に服する学問が問題になっているのである。そうでなければ、パスカルは「すべての人はたいてい証明によってではなく、快適さによって信じるようにしむけられる」ことを嘆きはしなかったであろう。「この道は低級で卑劣でよく知られていない」と言いながら、かれは常に認識の同じ領域のことを考えている。快適さは理性の行使のみに服する認識とは無関係だからである。

パスカルはすぐ、いま述べたばかりの命題の限定的性格に気づいた。かれは神の真理を別にする必要を感じた。

わたしはここでは神の真理について語らない。それらを説得術のうちに入れないように注意しよう。神の真理は自然を無限に越えているため、神ご自身だけがそれらを魂に、しかも神のみ心にかなった方法で置くことができるからである。

この方法こそ信仰による恵み、神から人への賜物、人間が自分の力で獲得することのできないものである。パスカルはすぐにははじめに論じたテーマに戻らない。神の真理の問題は、少なくとも、純粹に人間的な真理の問題と同じくらいかれには興味がある。それでパスカルは信仰の心理学とでも言うべきものを入念に作り始める。

神は神の真理が精神から心情へではなく、心情から精神へ入ることを望まれたことをわたしは知っている。わたしの考えるところ、それは、意志が選んだことからの審判者たらんとする推理の高慢な力を辱め、自分の卑しい

執着のために常に墮落している病める意志を治療するためである。……

以上のことから、神は自然的事物のなかに、人間にとって自然であるべき秩序に真に向から対立するこの超自然的秩序を立てられたように思われる。

ここには「真空論序論」以来の理性と信仰との対立がより明確な形で見いだされる。推理が精神に語りかけるのに対し、信仰による服従によって権威へと関係づけられるのはまず心情である。とはいえ、神の真理は知的活動と無関係と決まったわけではない。「神の真理は心情から精神へ入る。」もしこの「心情」がここでは信ずる能力を指していることを認めるなら、われわれはパスカルの小論中にアウグスティヌスの主要なテーマ「知らんがためにわれ信ず」を見いだすことは容易である。トマス派の伝統によれば、魂の存在とその不滅性と同様に神の存在とその完全な性質、摂理とあらゆる被造物の神的起源を人間が認めるのは、まず理性を通してである。これに対し、アウグスティヌス主義者は啓示を、理性的真理と信仰的真理に安易に分けられない一個の塊ととらえる。このような見方に立つと、真理はすべて相互依存の関係にある。他方を知らずに一方を知ることとはむずかしい。しかも、このような認識は必然的に不完全なものになろう。ここから、あらゆる神学的・宗教的真理に対しては、理性的探求に取りかかる前に、前もって権威原理に服従する必要が生じる。このことは信仰の問題から理性の活動すべてを排除するわけではない。アウグスティヌス主義は信仰絶対論ではないからである。しかし、この見地では、推理は単に信仰の延長と深化としてしかとらえられていない。

このような見解は直ちに弁証論に適用できるわけではない。おそらく、無信仰者を最初から権威へ服従させることは有効ではなかろう。かれらの考え方はまさにこの服従の拒否を特徴としているのであるから。ジュリアン＝エイマール・ダンジェ師<sup>3)</sup>がパスカルの態度と聖アウグスティヌスの教説の間に認める対立は表面的なものにすぎない。たとえ弁証論の論証の一部に理性的な個所が

3) 『パスカルとその先駆者たち』98ページ Julien-Eymard d'ANGERS, *Pascal et ses précurseurs*, Nouvelles Editions Latines, Paris.